ヴィクトル・ユゴーと反ユダヤ主義

13 世紀ドイツの「儀式殺人」伝説への言及をめぐって

菅野 賢治

これまでの研究の動向

「グループ・バルザック」「グループ・ミシュレ」などと並んでパリ第七大学の「十九世紀研究チーム」の一角を占める「グループ・ユゴー」は、2000 年 10 月 21 日の研究会において「ユゴーの反ユダヤ主義」を討論の主題に掲げた。討論は、参加者の一人（F・シュネ）が、1843 年、刊行と同時にユダヤ系フランス人たちからの抗議にさらされたユゴーの戯曲『城主たち』のある一節（本稿後述）に言及しつつも、その一点のみをもってユゴーの反ユダヤ主義について速断すべきではないと注意を促すところから始まり、ほかの発言者からも、とりわけユゴーの初期作品に目立つ反ユダヤ的な表現には「時代の産物」として情状酌量の余地があること、そして、彼の後期の作品と行動に示された親ユダヤ的傾向は、初期の表現上の放埒さを埋め合わせて余りあるものであること、さらに、一般に十九世紀の知的、文学的風土のなかに「時代の産物」として表出している反ユダヤ主義と、二十世紀、特定の政治綱領、現実の施策として具現してしまった反ユダヤ主義とを安易に結びつけながら過去の文学を論じることの危うさなどが指摘された[1]。個々の論点に関する賛否はさておき、十九世紀フランス最大の文人の名の下に集う研究グループが、二十世紀を締め括る討論会の場において、二十一世紀に持ち越さねばならない課題の一つとして「反ユダヤ主義」を採り上げるということ自体、時代ごとに文学研究者の意識（ないし良心）に課される問題系の推移を映し出す事象として興味深い。

現代フランスを代表するユゴー研究家諸氏によるこの討論のなかに、「ユゴーと反ユダヤ主義」をめぐる主題系はほぼ出揃っていると見てよいだろう[2]。

---

[1] 発言者 J. Acher, F. Chenet, A. Laster, B. Leuillot, C. Millet, C. Rétat, J. Seebacher, D. Sellem, A. Ubersfeld, V. Wallez。討論会の要旨は、グループのインターネットサイトに掲載（http://groupugo.div.jussieu.fr/groupugo/00-10-21.htm）。

[2] ユゴーとユダヤ世界を繋ぐ今ひとつの主題系として、ドゥニ・ソーラの先駆的研究（Denis Saurat, *La religion de Victor Hugo*, Hachette, 1929）からジャック・エラダンの近著（Jacques Eladan, *Victor Hugo, la Bible et la Kabbale*, NM7 Editions, 2002）まで、聖

同主題に関する先行研究（レールマン、ポリアコフ[3]）も、ヴォルテール思想の深い刻印を受けた初期の反ユダヤ主義から、戯曲『トルケマダ』（1882 年）における異端審問糾弾と、ロシア・東欧におけるポグロムに対する抗議声明として表出する晩年の親ユダヤ主義まで、ユゴーのユダヤ観が「正の方向」へ辿った道のりを叙述する点において概ね見解の一致を見ている。翻って、後世の反ユダヤ主義陣営の言説においても、この変遷が（当然のことながら「負の方向」に向かうものとして）追認されている。たとえば、ユゴーの死の翌年、フランス反ユダヤ主義のバイブルとして世に送り出されたエドゥアール・ドリュモンの『ユダヤ人のフランス』（1886 年）においては、『文学・哲学雑記』、『クロムウェル』、『メアリー・テューダー』といった初期作品から、作者ユゴーの「お墨付き」とともに反ユダヤ的言説がふんだんに引用されるのに対して、晩年のユゴー（とりわけ死の床のユゴー）については、周囲のユダヤ人とフリーメーソンに籠絡され、完全なるユダヤ贔屓になり果てた人物像が恨みがましく描き出される[4]。こうして、「時代の朗々たる木霊（エコー）」を自任した十九世紀の大詩人について、二十一世紀の研究者の良心は、ドレフュス事件期から両大戦間期、ドイツ占領期を経て今日まで、姿形を変えながら執拗に存続する反ユダヤ主義との内通を疑われる恐れもなく、晴れ晴れと作家研究に専念できるということなのであろう（上記、討論会にも、その種の「潔白証明」の必要が底辺に感じられる）。

しかし、もとよりわれわれの眼目は、一人の作家やその筆の下に産み出された作品が、なんらかの基準に照らして「反ユダヤ主義的か否か」を断ずることではない。作家が残した言葉 —— 作品のなかであれ、私的な書き物のなかであれ —— から、反ユダヤ的なものと親ユダヤ的（ないし反＝反ユダヤ的）なものを腑分けし、そのいずれかにことさら目を伏せたり、一方をもって他方の重みを相殺させたりすることによって、作家や作品を「救う」、

書（いわゆる「旧約」）とユダヤ神秘主義（とりわけカバラー）がユゴーの詩作ならびに宗教思想のなかに占める位置に関する研究の水脈が存在する（エラダン同書巻末の書誌を参照）。一部の論者が推察したとおり、ユゴーを初期の反ユダヤ主義から後期の親ユダヤ主義へと導いたのが、本当に、アルザス出身のユダヤ人作家にしてカバラー学者アレクサンドル・ウェイルの影響力であったと言い得るかどうか（エラダン、182 頁）という点を含め、本来、この主題系を併せて「ユゴーとユダヤ」を論じる必要があるだろう。

[3] C. Lehrmann, *L'Elément juif dans la littérature française*, tome 2, A. Michel, 1961, pp. 30-37 ; レオン・ポリアコフ『反ユダヤ主義の歴史』第三巻「ヴォルテールからヴァーグナーまで」、菅野訳、筑摩書房、2005 年、455-456、472-473 頁。

[4] Edouard Drumont, *La France juive, essai d'histoire contemporaine*, C. Marpon et E. Flammarion, 1886, tome 1, pp. 104, 206-208 et 354, tome 2, pp. 432-434.

あるいは逆に「貶める」作業にもさしたる意義を認めない。そもそも反ユダヤ主義自体、定型も外延も判然としない透明なエーテルのごとき観念実体であり、その含有量を、一人の作家、一個の作品の枠内で決定しようとする作業において、計量の対象となるのは、実のところ、作業に乗り出す者自身の反（親）ユダヤ主義の度合いにほかならない場合が多い。むしろ、われわれの探究の照準は、その不定形にして外枠も定めがたい反ユダヤ主義のイデオロギーそのものに合わせられている。いつの時代、いかなる人間にあっても、個々の言動のうちに変幻自在の表出を遂げる反ユダヤ主義を、一人の作家のある瞬間における思考、一つのテクストのある文脈における意味作用を「介して」把捉し、検証したいのである。「ヴィクトル・ユゴーと反ユダヤ主義」と題して、われわれの主眼は、ユゴーが（言葉以前の）反ユダヤ主義をいかに捉えていたかではなく、むしろ、反ユダヤ主義が、ある瞬間におけるユゴーの思考をいかに捉えてしまっているか、ということの方にある。語弊を恐れずに言えば、ユゴーのテクストを網として「利用」し、そこに反ユダヤ主義を誘き寄せ、その本性を一部なりとも捕縛したいのだ。

本稿の枠内で、初期から晩年まで、ユゴーの作品全体におけるユダヤ観を検証することは無論不可能であるが、以下、初期から中期への移行期に位置づけられる旅行記『ライン河』（1842 年）と戯曲『城主たち』（43 年）を採り上げ、そこに十三世紀にまで遡る「儀式殺人」伝説の形跡を読み取ることをもって、今後、きわめて膨大なものになりかねない一研究の端緒としたい。

1287 年、オーバーヴェーゼルの儀式殺人事件

1287 年の聖金曜日、ライン河畔、コブレンツとマインツのほぼ中間に位置する小邑オーバーヴェーゼルで、15 歳の少年ヴェルナーが行方不明となった。数日後、八キロほどライン河を遡った隣町バッハラッハで少年の惨殺死体が発見され、たちまちそれがユダヤ人による「儀式殺人」と断定される[5]。十三世紀末に発生した事件とあって、公の調書などは残されていないが、まずは口承の伝説として、ついでカトリック教会の聖職者らの手による殉教伝のな

[5] 十二世紀以降、ヨーロッパ各地で、ユダヤ人をキリスト教徒の幼児ないし処女の殺害者に仕立て上げつつ頻発するようになった「儀式殺人」（アングロ＝サクソン圏では「血の中傷」とも）について、レオン・ポリアコフ『反ユダヤ主義の歴史』第一巻「キリストから宮廷ユダヤ人まで」、菅野訳、筑摩書房、2003 年、81 頁以下を参照。ポリアコフ同書には、オーバーヴェーゼルの聖ヴェルナーに関する記述は見当たらない。

かで、事件の顛末はおおよそ以下のように描き出される。復活祭を控えた聖木曜日の夕、教会のミサに列席し、聖体拝領を受けて帰宅途中のヴェルナー少年に、ユダヤ人の一群が襲いかかった。目的は、少年の口の中にまだ残っているかもしれない聖餅（ホスチア）を奪い、さらには彼を殺害して、ユダヤ教の過越祭に欠かせないキリスト教徒の生血を採取することであった。死体の傍らに投げ捨てられていた凶器は、葡萄栽培に使う農具であった。亡骸は徹底的に痛めつけられており、伝承の異本によっては、それが、血の最後の一滴までを採取する目的で、葡萄棚から逆さ吊りにされていたともいわれる。また別の異本によれば、ヴェルナー少年の死体は、まずライン河に投げ込まれたのだが、奇怪なことに、それが水の流れに逆らって漂い始め、上流のバッハラッハの河畔に打ち上げられたのだという。翌 1288 年、地元のカトリック聖職者たちの手により、オーバーヴェーゼルの町に殉教者ヴェルナーを祀る礼拝堂が建設された。続く十四世紀、オーバーヴェーゼルとバッハラッハは、教皇による列聖認可も待たずして聖人化された「聖ヴェルナー」の殉教の地として名を馳せ、巡礼者は、ライン河一帯のみならず、遠く東ヨーロッパから、そしてフランス王領、諸侯領からも詰めかけるようになった。特にブザンソン大司教ティボー・ド・ルージュモンがヴェルナーの墓に詣で、その後、ブザンソンでヴェルナー崇拝を盛んに奨励したこと、また、いつしか「聖ヴェルナー」が葡萄農家の守護聖人と見なされ、葡萄畑を耕す農具を携えた姿で表象されるようになったことも手伝って、「ヴェルナー（Werner）」伝説は、「ヴェルニー（Verny）」ないし「ヴェルニエ（Vernier）」伝説に名を変え、フランシュ＝コンテからブルゴーニュ、オーヴェルニュ地方へ、農民層のあいだで急速な広がりを見せた[6]。ラルース『十九世紀世界大辞典』の「オーバーヴェーゼル」の項（第十一巻、1874 年）にも、「言い伝えによれば、1287 年、地元の少年が、その信仰心ゆえに、ユダヤ人らの手によって殺害されたという」との記述が受け継がれている。

今日なお、当地はライン河遊覧の要所としての地位を保ち、インターネットの観光サイト、歴史サイトにも、「伝説によればユダヤ人に殺害された」としてヴェルナーの事蹟が事も無げに紹介されている[7]。「ローレライには興味を示しても、人びとはユダヤ人の受難の歴史など一向に知ろうとしないよ

---

[6] Marie-France Rouart, *Le Crime rituel ou le sang de l'autre*, Berg International Editeurs, 1997, pp. 200-213.

[7] 一例として、下記サイトを参照。
http://www.heiligenlexikon.de/BiographienW/Werner_von_Oberwesel_von_Bacharach.htm

うである。各地の美しい風景を月々に配した1978年のあるドイツのカレンダー。七月の暦をめくると、ライン河を背景にしたバッハラッハの写真がのっている。中央に立派なゴシック様式の教会。1890〜92年に再興された聖ヴェルナー教会である[8]。」

『ライン河』と『城主たち』のなかの儀式殺人

1840年、38歳のユゴーは、二度目のライン旅行に出かけ、9月、ザンクト＝ゴアールに長逗留しながら、近隣のオーバーヴェーゼル、バッハラッハを訪れた。前々年のシャンパーニュ旅行、前年のアルザス、スイス旅行と併せて、この旅程から、42年刊行の『ライン河』、ならびに43年上演・刊行の『城主たち』の着想と書き割りが豊富に引き出されることとなる。

『ライン河』中、オーバーヴェーゼルの儀式殺人伝説は以下のように挿入される。

> 封建制がみずからの大河に点々と配置した巨大な境界標石のようにして、ライン河畔の古城たちが風景を夢想で満たしている。[･･･]それらの古城は見たのだ。1415年にはコンスタンツ公会議でヤン・フスを裁くため、1431年にはバーゼル公会議でエウゲニウス四世を教皇位から引きずり下ろすため、1519年にはヴォルムス帝国会議でルターを尋問するため、西方の司教たちが、ある者は騾馬に跨り、ある者は駕籠に乗り、ライン河に沿って長い列をなし、居丈高に、威風堂々と通り過ぎていくのを。それらの古城は見たのだ。1287年、ユダヤ人どもの手にかかって殉教の死を遂げ、ライン河に投げ込まれた哀れな少年、聖ヴェルナーの白く濡れそぼった屍が、オーバーヴェーゼルからバッハラッハまで、ブロンドの髪を水に溶け合わせながら、陰鬱に大河を遡って漂っていくのを[9]。

さらに翌1843年の3月7日、コメディー＝フランセーズで初演され、その不人気をもってロマン派劇の失墜を印づけたといわれる『城主たち』には、同じ逸話が次のように加工されて挿入されることになる。

---

[8] 木庭宏『ハイネとユダヤの問題 —— 実証主義的研究』、松籟社、1981年、240頁。

[9] Victor Hugo, *Le Rhin*, lettre XXV, *Œuvres complètes*, édition chronologique publiée sous la direction de Jean Massin, Le Club français du livre, tome VI, 1968, pp. 394-395（榊原晃三による抄訳『ライン河幻想紀行』（岩波文庫、1985年）にこの箇所は収録されていない）。

わしは、あの子をゲオルクと名付けた……。—— ああ！　いつか貴女が母親になったら、

貴女から遠く離れた場所で子供たちを遊ばせるようなことは断じてなりませぬぞ！——

誰かが、わしからあの子を奪い去った。—— 数人のユダヤ人、一人の女が！なんのために？

自分たちの安息日に、あの子の喉を掻き切るためだったという。—— わしは今も泣きくれておる[10]。

台詞の主は、百歳もの高齢に達した城主ヨープであるが、この挿話自体、劇の筋書きにはほとんど無関係である。ヨープはただ、死の病から奇跡的に快復した美女レーギナを前にして、彼女を愛する青年オトベルトの若々しさを讃えながら、生きていれば（ユダヤ人らに殺されることがなければ）ちょうどオトベルトくらいの年齢に達しているはずの亡き息子ゲオルクの思い出を蘇らせているのみである。冒頭の舞台設定において、ユゴーは物語の年代を「12××年」と暈かしているが、登場する実在人物の年齢などから逆算して、時代は明確に 1213 年に位置づけられるという[11]。よって、史実として、息子ゲオルクが 1287 年のヴェルナーに重ねられているわけではない。ヴェルナー少年がライン河畔の城主の息子であったという筋書きも成り立ちにくく、ここでユゴーは、ことさらオーバーヴェーゼルの聖ヴェルナー伝説を喚起するというよりも、いたいけな男の子がユダヤ人によって連れ去られ、彼らの安息日のために殺害されるという逸話が、書き割りとしてライン河畔の中世の空気を感じさせるのにいかにも相応しいという判断から挿入を思い立ったにすぎまい。

しかし、上記、ユゴー研究会の討論の場で F・シュネが議論の端緒として言及していたように、1843 年、『城主たち』の刊行直後、ユゴーは、『イスラエリット古文書』紙の編集長（おそらくサミュエル・カエン）から、この一節をめぐって抗議を受け、それに以下のような手紙をもって応じているのだ。

サン＝マンデにて、1843 年 6 月 11 日

貴殿は私のことを誤解なさっており、私はそのことを非常に残念に存じます。と申し上げますのも、この私が、貴殿のように、功労、学知、人間性、そのい

---

[10] *Les Burgraves*, deuxième partie, scène IV, *ibid.*, tome VI, p. 618.

[11] *Ibid.*, p. 577. ジャン・マサンによる註を参照。

ずれにおいても申し分なき方を傷つけてしまったとなれば、それは私にとって真の心痛の種になるからです。戯曲に携わる詩人は歴史家であり、そして、歴史をやり直すことができないという点においては一般の人々と変わりません。しかるに、十三世紀とは薄明の時代であります。そこには厚い闇があり、光明はほとんど見出すことができません。いたるところ、暴力、犯罪、数限りない迷信、そして途轍もない野蛮さがあるのみです。ユダヤ人は野蛮でしたし、キリスト者もまた野蛮でした。キリスト者は圧制者であり、ユダヤ人はその下で虐げられておりました。そしてユダヤ人は、それに対して反応していた。これについて、貴殿は、今、何をどうなさろうとおっしゃるのですか？　それこそは、押さえつけられたバネ、虐げられた民の法則というものです。つまり、先に私の手紙のなかで申し上げたように、ユダヤ人は、暗々裏に復讐を成し遂げていた。作り話であれ、史実であれ、聖ヴェルナー少年の伝説がそのことを証明しております。たしかに、人は実際にあったこと以上のものを信じ込んでいたのかもしれませんし、民衆の噂が事実を大きく見せていたのかもしれません。人間の憎悪が、いつもの例に漏れず、ありもしない話を作り上げ、あらぬ中傷を繰り広げていたのかもしれません。それは十分にあり得ることですし、ほとんど確かなことでさえあります。しかし、それに対して、われわれが何をなすことができるでしょう？　時代を描き出す時には、似たようなものとしてそれを描き出さねばなりません。古き時代は、迷信に満ち、騙されやすく、無知で、野蛮であった。ならば、その迷信、騙されやすさ、無知、野蛮さにそのまま付き従わねばならないのです。この点において、詩人には何もなす術がありません。ただ、「それこそは十三世紀である」と述べるにとどめ、そして、その所見だけをもって事の説明としては十分なのです。

しかし、だからといって、今、われわれが生きている時代に、ユダヤ人が子供らの喉を掻き切り、その肉を喰らっているという意味になるでしょうか？とんでもありません。今、われわれが生きている時代にあって、貴殿のごときユダヤ人は学識と光明に充ち満ちていらっしゃいます。そして、私のごときキリスト者は、貴殿のごときユダヤ人に対する尊敬と敬意に充ち満ちております。

ですから、どうぞ、『城主たち』を大目に見てやってください。そして、私の方から握手の手を差し伸べることをお許しください。

ヴィクトル・ユゴー[12]

ル・クラブ・デュ・リーヴル版全集の編者ジャン・マサンは、この書簡に註をほどこし、「ユゴーの自己弁護はかなり脆弱なものである」と厳しい評価を下す[13]。「『作り話と史実』のあいだで裁断を下すことを拒むため、みずからを『歴史家』として提示しながら、ユゴーは、『儀式犯罪』をめぐっ

[12] *Correspondance 1839-1843*, *Ibid*., p. 1232.
[13] *Idem*, note 6.

てキリスト教の側からなされた忌まわしき中傷を、純粋、単純に告発する代わりに、ユダヤ人の犯罪行為と復讐行為が現実のものだったのかもしれない、という疑いを漂わせたままにしておくのだ。」こうした指摘に対し、上記、2000年の討論会の参加者シュネは異議を唱え、「マサンは、ユゴーの反ユダヤ主義的発作をすべて狩り出す仕事に執心しましたが、それは、なによりも時代の産物だったのです。一般に引用されることはほとんどありませんが、ユゴーの名誉のためにも、この書簡からいくつかの要素を引き出しておかねばなりません。たとえば、そこではキリスト者が、野蛮人、圧制者として提示されているのです[14]」と述べ、中期以降、ユゴーのユダヤ観が辿った変遷を十分考慮に入れ、公正な評価を下さなければならない、と警告を発するのだ。

繰り返すが、ここでわれわれの主眼は、1840年前後のユゴーが反ユダヤ主義者であったかどうか、また、上の引用部分をもって『ライン河』や『城主たち』が反ユダヤ的な作品になっているかどうかを判ずることではない。主眼はあくまでも、これら二作品のための材料をライン河畔で渉猟したユゴーに、「儀式殺人」をめぐる反ユダヤ主義の言説がいかに取り憑いていたか、言い換えるならば、これら二作品のテクストの網に反ユダヤ主義のイデオロギーがいかに「引っかかって」いるかを観察することなのである。

ハイネ『バッヘラッハのラビ』との比較

1840年、ユゴーがライン河畔を訪れ、現地の歴史や伝説を吸収、咀嚼するに当たって、旅行の前後ないしその途上で参照したとおぼしき文献としては、アーロイス・ヴィルヘルム・シュライバー『ライン旅行者のための手引書』の仏訳[15]、ならびにトーマス・アルフレート・レーガー『ハイデルベルクの廃墟に旅する人々のための手引書』の仏訳[16]が挙げられている。このうち、オーバーヴェーゼルの聖ヴェルナー伝説に関する典拠となったのは、前者シュライバーの『手引書』であったと考えられるが、この書物は、今日、入手困難であることに加えて、重版にともなういくつもの異本があり、本稿の筆者自身、聖ヴェルナー伝説に関するユゴーの典拠をシュライバー仏訳の原文

---

[14] 本稿註（1）を参照。

[15] Aloys Wilhelm Schreiber, *Guide classique du voyageur sur les bords du Rhin*, revu par Richard (J.-M.-V. Audin), Paris, Audin, 1828-1829.

[16] Thomas Alfred Leger, *Le Guide des voyageurs dans la ruine de Heidelberg*, traduit de l'allemand par Charles de Graimberg, Heidelberg, Impr. de G. Reichard, 1836.

の上で特定するにはいたっていない。ただ、ハインリヒ・ハイネの小説断片『バッヘラッハのラビ』の成立過程を仔細に考証した木庭宏が、ハイネ自身の典拠としてシュライバー『手引書』のドイツ語原著第三版に当たり、聖ヴェルナー伝説に関する記述を検証しており、それを（むろん、ドイツ語原書からフランス語訳までの距離、版による記述の差異などを考慮に入れた上で）、ユゴーと聖ヴェルナー伝説の接点として参照することは可能だ。

> 城のすぐ下手にゴシック建築の輝かしい遺跡、聖ヴェルナー教会の骨組がまだ残っており、ひっそりと寂しく立っている。この教会に祭られている幼い殉教者ヴェルナーの話はヴェーゼルでの出来事である。ユダヤ人たちは、ヴェルナーを殺したのち、死体をライン河に投げ込んだ。だが屍は河をさかのぼり、バッハラッハに漂着した。この伝説は、歴史上の証拠があるだけに、険しく荒々しい偉大な自然に取り囲まれたこの廃墟の、深くメランコリックな印象をいっそう高めている[17]。

まずは、引用者木庭とともに、著者シュライバーが「教会建立の由来となったこのいかがわしい出来事に対し何の疑念もさしはさんでいない」という点、「そればかりか、子殺しの迷信をいわば揺るぎない事実として受け入れ、ヴェルナーを悼み、あがめ、そうしてユダヤ人に対する敵意をすらあらわにしている[18]」という点に驚きを新たにしておく必要があるだろう。そして、その驚きから発して、同一の伝説に対するユゴーとハイネの接近の仕方が、まさに百八十度の対称を呈していることに気づくべきであろう。

ハイネの『バッヘラッハのラビ』の筋書きや、その成立過程の詳細について、木庭の研究成果をここで反芻する紙面の余裕はないが、われわれの目にもっとも重要と思われるのは、ハイネが、未完の小説『バッヘラッハのラビ』を、未完であるにもかかわらず、1840 年の『サロン』所収の一作として活字にしておかなければならないと考えた、その動機である。かなり早い時期からユダヤ人に対する「儀式殺人」の中傷に興味を抱いていたハイネは、1824、25 年頃、オーバーヴェーゼルの聖ヴェルナー伝説を挿話として盛り込んだ『バッヘラッハのラビ』の執筆に取りかかっていながら、結末の筋書きがなかなか定まらないまま（木庭が述べているとおり、その紆余曲折こそ、ハイネのユダヤ観が辿った道のりそのものであったわけである）、中断を余儀なくされていた。その未完の作品を未完のまま 1840 年の刊行物に掲載するきっ

---

[17] 木庭、前掲書、239 頁。
[18] 同。

かけとなったのは、同年、シリアのダマスクス（ダマシュク）に発生した、もはや伝説ではない、現実の儀式殺人事件であった。

1840 年 2 月 5 日、ダマスクスに住むイタリア出身のカプチン僧トマソ神父が消息を絶つ。現地のフランス領事ラティ＝マントンが、早々と、これをユダヤ人による儀式殺人事件と断定し、実際に七名のユダヤ人が容疑者として逮捕され、拷問にかけられた。事件はたちまち一大外交問題に発展し、自国の外交官僚が下した推断にあくまでも信を寄せ続けるフランスのティエール政府は、西ヨーロッパ国際社会のなかで完全に孤立してしまう[19]。当時パリにいて、事件に対するフランス政府の対応と世論の反応をつぶさに観察していたハイネは、中世の伝説が同時代に蘇り、実際に無実のユダヤ人を苦しめながら、ヨーロッパの世論に反ユダヤ熱を掻き立ててしまう状況に対する憤慨を込めて、未完の小説の発表に踏み切った。つまり、『バッヘラッハのラビ』が 1840 年に日の目を見ることとなったのは、小説の筋書きそのものよりも、そこに挿話として組み込まれていた聖ヴェルナー伝説を、皮肉として、現実のダマスクス事件に衝突させてやる必要からだったわけだ[20]。

ユゴーとハイネが、シュライバーの同じ『手引書』に依拠し、同じ儀式殺人伝説を作品中に取り込む際に見せた、歴史感覚上の百八十度の「ずれ」はいまや明白だろう。ハイネの『バッヘラッハのラビ』が「迷信を公然と保持し続けるキリスト教世界の意識構造への挑戦[21]」であるとすれば、ユゴーの『ライン河』ならびに『城主たち』は、その意識構造に対する完全なる馴致、ひいてはその補強、再生産ですらある。そのことは、先に全文を掲げた『イスラエリット古文書』紙編集長宛の書簡からも十分に結論づけられるだろう。『古文書』は、1840 年 1 月、サミュエル・カエンによって創刊されたフランス初のユダヤ系機関紙である。同紙が最初にユダヤ関係の政治事件として採り上げることとなったのがダマスクス事件であり、であればこそ、その三年後、フランス・ロマン派の領袖が（不首尾に終わったとはいえ）舞台にかけ、書物として刊行した『城主たち』のなか、ふたたびユダヤ人による儀式殺人の妄信を補強するかのごときヨープの台詞を目にして、『古文書』紙の編集長は抗議の声を上げずにはいられなかったわけだ。それに応じた返信のなか

---

[19] ダマスクス事件の経緯と、その国際的反響については、ポリアコフ前掲書、第三巻、456 頁以下、ならびに Michael Graetz, *Les Juifs en France au XIXe siècle*, Seuil, 1989, p. 133 et sqq. を参照。

[20] H・キルヒャー『ハイネとユダヤ主義』、小川真一訳、217 頁、ならびに Rouart 前掲書, p. 210.

[21] 木庭、前掲書、239-240 頁。

で、ユゴーが、「過去のユダヤ人は暗々裏に復讐を成し遂げていたのであり、作り話であれ、史実であれ、聖ヴェルナー少年の伝説がそのことを証明している」と述べて憚らない、その歴史感覚の所在こそをここにはっきりと確認しておかなければなるまい。事実、この理論運びは、のちの1914年、アルベール・モニオなる人物が儀式殺人研究の集大成として著した書物にエドゥアール・ドリュモンが寄せた序の一文 ——「過去において、伝説がこれらの事実に幾分ロマネスクな細部を付け加えることがあったとしても、やはり、その実在性を否定することは不可能である[22]」—— にさえ、時間を超えて響き合うのだ。

ダマスクス事件は、1840年の春から夏にかけて、フランスのみならず西ヨーロッパ全体の世論を包み込む一大騒動に発展した。パリにいて、ライン旅行の準備を整えていたユゴーが、事件の顛末について無知であったとは考えにくい。ダマスクス事件の真相をユゴーがいかに捉えていたか（あるいは、いなかったか）を示す指標は、目下、文献の上で確認されていないが、確かなことは、1840年、中東の地で現実に起こった儀式殺人の中傷事件が世論を騒がせ、ハイネに大いなる危惧と憤慨を抱かせた、その直後、ライン河畔のオーバーヴェーゼルに由来となった教会の廃墟という「歴史上の証拠」がある以上、ユダヤ人によるヴェルナー少年殺しが実際にあったに違いないと断ずるシュライバーの『手引書』を携えて現地を訪れたユゴーが、やはり、脈々と伝えられた「伝説」が存在する以上、そこに迷信や誇張が入り交じっているとしても、それをかつてユダヤ人が「暗々裏に復讐を成し遂げていた」ことの「証明」として受け取らざるを得ないという判断のもと、みずからの作品のための覚書を書き下したということだ。

ここで、1840〜43年のユゴーの意識をそのままシュライバーの記述（ひいては「キリスト教世界の意識構造」）に飛びつかせてしまったもの、そして、彼の目を同時代の儀式殺人事件の理不尽、悪辣さには閉ざす一方、十三世紀のライン河畔に遡るいかにも頼りない伝説の上でなにがしかの「真実」に覚醒させてしまうもの、それこそは反ユダヤ主義イデオロギーの本質の一部である。反ユダヤ主義とは、人をして積極的にユダヤ人に対する中傷の言辞を吐かしめるばかりでなく、ユダヤという、キリスト教世界の「内なる他者」をめぐって、ある側面には目を閉ざさせ、ことさら別の側面へと思考を準備させてしまう、視線と思考の操り手としても機能するものなのだ。少なくと

---

[22] Albert Monniot, *Le Crime rituel chez les Juifs*, préface d'Edouard Drumont, Pierre Téqui, 1914, p. VII.

も、「時代の産物」として済ませてしまうにはあまりに豊かな文学の主題がここに顔を覗かせている。